

郷土博物館・文学館だより

第18回 渋谷現代短歌募集 優秀作・佳作発表

渋谷には、明治時代から現在に至るまで、多くの文学者が住み、近代短歌の発展に貢献してきた雑誌『明星』や『アララギ』も渋谷で発行されました。当館では、こうした渋谷の文学風土を継承し、区民をはじめ多くの方々に渋谷を再発見していただく機会として、年に一度、「渋谷」を題材にした短歌を募集しています。

18回目を迎えた平成29年度は、29名から89首が寄せられました。前年度と同じく、歌人・相沢光恵先生によって優秀作5首、佳作5首が選ばれました。作品を書写した色紙は、4月1日から8日にかけて、当館に特別展示されました。また、4月27日には渋谷区役所第三庁舎会議室にて表彰式が行われました。

平成30年度は、文学講座「短歌で四季を詠む」を、5月から開講しています。これからも「短歌の街・渋谷」を目指し、様々な活動をしてゆきますので、ご期待ください。



祝辞を述べる
豊岡教育長



表彰状を授与
される入選者
の方々

第十八回渋谷現代短歌く優秀作・佳作く

歌人 相沢光恵選

〔優秀作〕

幡ヶ谷の線路にかかる歩道橋

友と眺むるダイヤの富士を (大熊 順三)

せせらぎにクレソン咲いて孤高なる

白鷺遊ぶ玉川上水 (木原 昭子)

渋谷駅周辺ビルは工事中

いかにあらわる国際都市は (功刀 國子)

午後八時テールランプが点滅し

道玄坂いま動脈となる (藤崎 桂子)

神宮の森に響動(とよ)もす応援歌

眼閉つれば戻る青春 (三澤 正弘)

〔佳作〕

再開発渋谷の駅の迂回路を

矢じるし頼りに行ったり来たり (系井 修三)

一夜明け渋谷駅への雪の道

ゴム長靴の若者も行く (神田美智子)

きりきりと耳切る風は首もとへ

入りにハチ公きりと前向く (小屋野優子)

どこへ行くも渋谷は坂の多い町

電動自転車私を助く (新谷 房子)

八幡の祭り屋台で父子酒

父亡き後も変わらぬもつ煮 (高久 芳樹)

貝塚からわかる縄文人の食生活

ビルが林立する渋谷でも、これまでに縄文や弥生時代を中心に遺跡が発見されています。発見された遺跡の中には貝塚もあり、縄文時代の代表的な貝塚として、明治神宮内にある明治神宮北池貝塚、広尾の羽沢貝塚、そして恵比寿にある豊沢貝塚をあげることができます。

貝塚というと、たとえば千葉県内で見ついている貝塚のように、たくさんの貝が堆積して大きな塚状になっているものを想像される方が多いかもしれません。しかし渋谷で見ついている貝塚は、少しちがいます。使わなくなった貯蔵用の穴などの中に、食べ終わった貝や動物の骨を捨てたものがほとんどです。地点貝塚と呼ばれています。

恵比寿二丁目にある豊沢貝塚は縄文時代の後・晩期が中心の遺跡ですが、旧石器時代から古代まで、長い間、人が住んでいたことが発掘調査からわかりました。これまでに 20 地点の調査が行われ、第2地点では 35~40 歳ぐらいの男性の人骨が二体も出土しています。

さて、豊沢貝塚に住んでいた縄文人は、どんなものを食べていたのでしょうか。それを知る手がかりは、貝塚から出てきた貝や動物の種類を丹念に調べることからわかるのです。縄文人からすれば、「そんな個人情報に断りもなく」とおこられそうですが、3,000 年以上前の食生活を知るためには、貴重なデータになります。では平成 29 年 (2017) に調査をした第 17 地点のデータを見てみることにしましょう。

まず第 17 地点で出土し、分析に使用した資料の点数は、全部で 2,398 点でした。確認され

た貝の種類は、アサリ、ハマグリ、オキシジミ、バイガイ、ハイガイ、バカガイ、マガキ、シオフキガイなどでした。魚類では、マアジ、サバ、キス、ヒラメ、フグ、ブリ、スズキ、マダイ、アカエイ、サメ、ウナギなどが確認されています。動物そのほかでは、イノシシ、タヌキ、ヘビ、カエルなどがわかりました。

このように豊沢貝塚の縄文人は、植物は残念ながら残っていませんが、海のもの、川のもの、山のもの、あらゆるものを食べていたことがわかります。しかも現代の私たちが食べているものと、ほとんど変わりません。高級魚や毒のあるフグまで食べているのです。毒についても、ちゃんと理解していたのでしょうか。手に入れた食材を、そのまま生で、焼いて、煮て、燻製にして、どんな料理方法で食べていたのでしょうか。興味がわくところです。

また、分析に使用した 1,601 点の魚類の骨だけに注目してみると、全体の約 4 割がマアジ、約 1 割がウナギでした。個体数の問題もありますが、豊沢貝塚の縄文人はマアジやウナギを好んで食べていたようです。



豊沢貝塚第 14 地点第 2 土坑の貝層上部のようす
(第 17 地点のすぐ西隣に位置します)

“白百合の君” 山川登美子

与謝野鉄幹が渋谷に創設した東京新詩社には、与謝野晶子のほかにも才能を評価された女流歌人が存在しました。山川登美子は彼女たちの中でも、特に強い印象を与える歌人です。

登美子は明治12年(1879)、福井県遠敷郡竹原村(現・小浜市竹原)に生まれました。明治33年に母校である大阪府の梅花女学校の研究生となり、英語を専修する傍ら、詩歌の創作を始めます。他誌に掲載された登美子の短歌を、鉄幹が新詩社の機関紙「明星」2号に転載したことを機に、登美子は「明星」の同人となり、同年8月には鉄幹、鳳志よう(後の与謝野晶子)と出会います。“白百合”の号で歌を詠む中で、登美子は歌友である晶子と「明星」を牽引する気鋭の女流歌人として、また鉄幹をめぐる恋のライバルとして、互いに切磋琢磨する間柄になりました。

明治34年、登美子は鉄幹への思いを断ち、親の勧めに従って帰郷・結婚します。しかし意に添わぬ形で一緒になった夫は、当時は不治の病であった結核を患い、登美子は結婚わずか一年で夫と死別しました。

生家に戻った登美子は明治37年、上京して日本女子大学英文科予備科に入学し、翌年1月には新詩社の女流歌人3人(晶子・登美子・増田雅子)による合同詩歌集『恋衣』を刊行します。女性だけの詩歌集が珍しかったこともあり、『恋衣』は評論家の生田長江に高く評価され、同年に2回も重版しました。

不幸にも『恋衣』は、出版が大学側から妨害されかけるという憂き目に遭います。当時物議をかもした晶子の詩「君死にたまふことなかれ」の掲載、タイトル『恋衣』への批判など、理由は複数挙げられますが、鉄幹の尽力により何とか出版にこぎつけたことが、詩人・上田敏が鉄幹に宛てた書簡からうかがえます。

この頃、夫の命を奪った結核に自らも感染・発症し、登美子は明治40年に日本女子大学を中退しました。翌年には父親が病没し、大雪のなか面会に向かった登美子の病状は悪化します。明治42年、登美子は結核のため郷里で29年の短い生涯を閉じました。

「明星」の同人であり、後に増田雅子の夫となった茅野蕭々は、渋谷の与謝野宅で毎月行われた「一夜百首会」に出席する登美子の様子を「山川様、大人びて、寂しらの御顔、実に世に泣くこと多き方なるべし」と描写しました。物静かで穏やかな人柄と評された登美子ですが、「わが息を芙蓉の風にたとへますな十三絃をひと息に切る」「さらば君氷にさける花の室恋なき恋をうるはしと云へ」などの歌からは、自身の運命をただ嘆くのではない、確固たる自己を持った歌人の肖像を思い描くことができます。



『恋衣』本郷書院
明治38年(1905)

文化財紹介

「上宮寺本堂・応接部分及び鐘楼」

(大正3年)

(平成29年10月27日 国登録文化財)

所在地 広尾5-2-29



上宮寺本堂

上宮寺本堂・応接部分及び鐘楼は、四方吹放しの四脚鐘楼の三棟は、平成二十九年十月に国登録有形文化財(建造物)に登録されました。

上宮寺は、浄土真宗本願寺派の寺院で、神奈川県津久井郡藤野町名倉(現相模原市緑区)に建立されたといわれます。

大正二年(一九一三)十二月に、京都府出身の蔵田了観により現在の地に移転し、寺名を善福寺から蔵田山上宮寺へと改めました。その当時のこの界隈は、上宮寺の目の前には七星舎牧場があり、のどかな風景が広がっていました。

現在の上宮寺は、通りに面して山門を構え、境内の右手側に新築の上宮会館、左手側には鐘楼、正面左手に本堂を配しています。今回、登録された建物部分分は、本堂と応接部分及び鐘楼の三棟になります。本堂の外観は、木造平屋建て瓦葺の入母屋造で妻入を設けています。応接部分も、木造平屋建て瓦葺の切妻造で平入となっています。鐘

楼は、四方吹放しの四脚鐘楼で、切妻造、棧瓦葺となっており、梵鐘も建立当時のものが現存します。三棟ともに、境内の手水鉢、本堂内の「遷仏慶讃会」板が、ともに大正三年三月「蔵田山上宮寺」と記されていることから、建設年代は大正三年と考えられますが、今から百年以上前に建てられたものとは思えないほど、手入れが行き届いています。

本堂の内部は、華やかな装飾が施された内陣に対して簡素な外陣の大空間、矢来により両空間が仕切られるなど、浄土真宗特有の仏堂の特徴がよく表現されています。

応接部分は、本堂南側に接続し、三つの部屋と玄関、前室と畳廊下で構成されていますが、良好な状態を維持しています。鐘楼も建設当時から変わらぬ姿をとどめており、上宮寺がこの地に移されたからの遺構も現存し、都市部における寺院境内の好例といえるでしょう。

【今後の展示予定】

◆企画展「渋谷のむかし写真展シリーズ 25」

平成30年6月16日(土)～8月5日(日)

◆企画展「ハチ公と忠犬ハチ公像」

平成30年8月11日(日)～10月8日(月)

◆特別展「作家・平岩弓枝」展

平成30年10月20日(土)

～平成31年1月20日(日)

白根記念

渋谷区郷土博物館・文学館

SHIBUYA FOLK AND LITERARY SHIRANE MEMORIAL MUSEUM

開館時間 ◆11:00～17:00(入館は16:30まで)

休館日 ◆月曜日(休日の場合はその直後の平日)・年末年始

入館料 ◆一般:100円(80円) 小中学生:50円(40円)

※1日以内は10名以上の団体料金

※60歳以上の方 障害のある方と付き添いの方は無料

お問合わせ ◆東京都渋谷区東4丁目9-1 TEL:03-3486-2791

郷土博物館・文学館だより vol.38

平成30年8月1日発行